

精いっぱい出し切る喜び



10月26日は立教の元一日。朝日に照らされたうろこ雲が秋の訪れを感じさせる。

真朋

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

神一条の道尽す理によって、何かの処
治まるといふ。鮮やか分かりあれば、
身上速やか。
明治22年4月27日

教祖御在世当時、先人先生方はたすけていただいたお礼に、自分にできる精いっぱい尽くされました。山中忠七先生は、毎日一升のお米を持って大豆越村からお屋敷に通われました。飯降伊蔵先生は、お社の献納を申し出られ、そこからつとめ場所の普請が始まり、たとえ一人になっても完成まで続けられました。その後も多くの先人たちが、朝から晩までお屋敷に詰め、教祖のお側でひのきしんをされました。

親神様への御恩報じに、また道のため、人だすけのために尽くす心を、親神様はお受け取りくださいます。欲を離れ、出し惜しみせず、骨惜しみせず、自分のできるすべてをやり切る。すると不思議と清々しい気持ちになり、心が勇んできます。

「尽くす」の本来の意味は、出し切ること。どんな中でもお屋敷に運ばれた先人たちを手本に、「どうぞ道の御用の上に、人だすけの上にお役立てください」との心を込めて、今自分にできる精いっぱいを出し切り、喜びと勇み心に溢れた御恩報じの毎日を送らせていただきますように。

正面方加

以前、私は口癖のように「忙しい」という言葉を口にしていた。ある時、「忙」という字は、「心が亡くなる」と書くんだぞ」と指摘され、反省したことがある。確かに、一つのことによって生懸命になり過ぎると、つい「忙しいから」と頼み事を冷たく断ったり「なぜ自分だけ忙しいんだ」と不足してしまうことがあった。こうした自分の都合ばかり考えている状態が「心が亡くなる」ということなのだろう。

信仰とは、人のたすかりのために心を使うこと。自分のことは脇に置いて、人のために心を動かす。そのために親神様は、私たちに心の自由をお与えくださっている。

諭達が発布され、いよいよ年祭活動が始まる。「人だすけのために、自分は何ができるだろうか」と懸命に心を使い、心を動かし、心を定めて、身も心も忙しい三年千日を送りたい。

《9月次祭 挨拶》

先人の真実に思いを致して

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、日頃から信仰の道に勤しまれ、たすけ一条に勇んでお励みくださいまして、誠にご苦勞様です。今日は9月の月次祭を心勇んで勤めさせていただきました。私は新型コロナウイルスに感染をして、先月の月次祭をご無礼いたしました。こうして皆様と共に恙なく勤めることができ、誠に有り難い次第です。

現在、私は本部の保安室長を務めておりますが、保安室では先月の末から6日間にわたり、防災講話と防災訓練を行いました。今から46年前の昭和51年9月2日に、北礼拝場が放火され、この時は迅速な対応によって鎮火しましたが、この経験から神殿、教祖殿をお守りするために、講話と訓練が続けられています。講話の準備をする中で、先人の勇み心と尽くされた真実の姿に改めて触れることができましたので、その話をしたいと思います。

おぢばにおける最初の普請は、つとめ場所の普請ですが、教祖が現身を隠されてからの神殿普請は、大きく3つあります。初めは大正普請。この普請で北礼拝場と教祖殿ができました。次に昭和普請。このときは南礼拝場と現在の教祖殿が建てられ、それまでの教祖殿は祖霊殿として使われるようになりました。そして3つ目が、敏夫前会長がふしん委員会副委員長と実施部長として現場の総責任を担わせていただいた東西礼拝場普請です。

この中で、昭和普請の最中の昭和7年に、松下電器（現在のパナソニック）の創業者である松下幸之助さんが、初めておぢばに帰られました。熱心に信仰している取引業者の方から、再三再四誘われていた幸之助さんは「それじゃあ、一度天理教の本部に参らせてもらおう」とその人に案内されておぢばへ帰られたのですが、その時が教祖殿普請の最中だったのです。

幸之助さんはそこで見た光景にびっくりされました。大勢の信者が喜んで普請に働いている。しかも、それが給金をもらうわけでもなく、全て奉仕、つまりひのきしんである。そして信者はみな礼儀正しい。また建設中の教祖殿の他にも立派な建物がある。大きな製材所で100人ほどの信者が製材している。これらの用材全てが信者からの寄進、自主的なお供えである。この親里で見た光景に大いに感動されたのです。

幸之助さんは、帰りの電車の中で「なぜだろうか」と考えた。天理教の信者はいきいきと働いている。これは自分の会社の従業員にはない姿だ。そして考え抜いたところ、ハツと気付いた。それは、天理教の信者には人をたすけるという「使命」がある。しかしうちの会社には使命がない。では、商売をする者の使命とは何か。当時の世の中はまだまだ貧しい時代です。「商売人の使命は、この世から貧困をなくして、人を救うことだ」と悟ったというのです。これが松下幸之助さんの経営方針の基礎になりました。そこで、おぢばに帰った昭和7年を、使命を知ったということから「命知元年」と定め、その年の5月5日に全社員を集めてこの方針を発表し、この日を松下電器の第一回創業記念日にしたのである。



昭和普請の光景を見るまでは、どうすれば儲かるのかばかりを考えて、売れるものだけを作れ、と社員にハッパをかけていた。これからは「人に喜ばれるもの、世の中に役立つもの、社会に貢献するものを作ろう。そして社員にもこの仕事を通じて生きがいを感じてもらおう」と考えて、会社の方針を大きく転換したのである。その後、売り上げは順調に伸びて、松下電器は日本有数の企業に成長していくのです。昭和普請は幸之助さんに大きな影響を与えて、松下電器が成長する土台となったのです。

何が幸之助さんに感動を与えたのか。それは当時の先人たちの普請に働く勇み心と、普請に尽くす真実の姿です。この姿が経営の神様と謳^{うた}われた松下幸之助さんの魂を揺さぶって、今や世界的企業となったパナソニックの成長に繋がっていくのです。

しかも幸之助さんが触れたのはたった1日です。この先人の勇み心と真実が、3年3カ月にわたって続くのが昭和普請であり、その結実として建ち上がったのが南礼拝場と教祖殿です。大正普

請も、東西礼拝場普請もあり。数多^{あまた}のようばく、信者の勇み心と

誠真実が伏せ込まれています。

大教会においても、教会設立の喜びに沸きたった新町の最初の神殿普請。大阪大空襲で全焼した後復興普請。現在の大教会神殿普請。その他にも詰所、信者会館の普請など、こうしてできあがった建物は、芦津のようばく、信者の

方々の真実の結晶であり、それぞれの教会の普請にも大勢の方々の苦勞と苦心が伏せ込まれています。

また、先人たちが残された足跡は普請に限ったことではありません。にをいがけ、おたすけ、ひのきしんに修理・丹精、親の御用やぢばへの伏せ込みの上に、旬々の御用の上に、一生懸命にまとめ励んでくださったのです。そのおかげで今日の私たちの道があります。

明日は大教会の靈祭を執行しますが、各教会が靈祭を勤める節目の月に、改めて先人の足跡とそこに伏せ込まれた勇み心と真実に思いを致して、「私は先人のご苦勞に、いかにすればお応えできるか。そして後に続く者に何を残せるか」ということを心に置いて、たすけ一条にしっかりと励ませていただき、成人の歩みを進ませていただきたいものです。

来月のご本部秋季大祭には、真柱様より論達をご発布いただきます。この論達の精神を全教の指針として、来年から年祭活動の三年千日が始まります。芦津の先人も教祖年祭の御用を一手一つに勇んで勤めて、大いなる成人の御守護を頂かれました。

この度の教祖百四十年祭活動も、何よりも教祖にお喜びをいただき、さらには初代や先人にご安心いただけるような心勇んだ成人の歩みを固く心に誓って、来る三年千日に臨ませていただきましたと存じます。

そのためにも年祭活動に向かう心づくり、理づくりの年である今年一年を、殊に秋の大祭を仕切りの目標として、しっかりとつとめ切らせていただきますように。

今日の月次祭、大変ご苦勞様でございました。

(要約)

《9月月次祭 神殿講話》

一人ひとりがおたすけを実践し

成人した姿をご覧いただく

役員 井筒文夫

以前NHKで、アネハヅルという鶴の特集がありました。アネハヅルは渡り鳥で、越冬のためヒマラヤ山脈を超えてインドへ渡ります。上昇気流が吹く谷を見つけ、翼をいっぱいに広げその上昇気流の中へ飛び込み、風の力で上昇する姿が映し出されていました。

私たちお道のお互いにも、風が吹きます。個人にも身上や事情、節という風を通して成人させていただく。お道全体にも風が吹く。それが年祭活動の句です。成人させてやろうという成人の句、たすけてやろうというたすけの句、御守護を普段以上に与えてやろうという御守護の句です。そのような上昇気流が吹くのが、年祭活動の

句です。広げる羽いっぱいに親の理を頂戴して、成人の道を歩ませていただきたいものです。

口に言われん、筆に書き尽せん道を通りて来た。なれど千年も二千年も通ったのやない。僅か五十年。五十年の間の道を、まあ五十年三十年も通れと言えはいこまい。二十年も十年も通れと言うのやない。まあ十年の中の三つや。三日の間の道を通ればよいのや。僅か千日の道を通れと言うのや。千日の道が難しのや。ひながたの道より道が無いで。(中略) たった三日の間や。三年の道通れば、不自由しようにも、難儀しようにもしられやせん。たった三日の間や。

明治22年11月7日

迎える三年千日、私たちお道の信仰者が歩むべき道、求める道とは、陽気ぐらしを味わうためにお残しくださった教祖のひながたを、ひながた通りに通ることに他なりません。

ひながたを規範に

教祖は、50年のひながたの最初、貧に落ち切る道を通られました。『稿本天理教教祖伝逸話篇』に、『貧に落ち切れ。貧に落ち切らねば、難儀なる者の味が分からん。』

四「一粒万倍にして返す」
「上から道をつけては、下の者が寄りつけるか。下から道をつけたら、上の者も下の者も皆つきよいやろう」

二八「道は下から」とあります。世界たすけの順序として、難儀不自由している人々から、たすけにかかられたのです。教祖は、月日のやしろにお定まりくだされた時点で、親神様そのものになられました。ですから、

すぐにでも不思議なたすけを見せ、奇跡的な御守護をたくさん与えられることも可能だったでしょう。いわば、終始褒められ、あがめられるひながたをお残しくださることもできたのだと思います。

しかし、もし褒められ、あがめられるだけのひながたなら、後々続く私たちは、決してその道を通ることはできないでしょう。後々の者が、末代かけて通りやすいように、わざわざ笑われせられるところからひながたをお始めくださったのでしよう。

また、教祖は明日炊く米さえないときでさえ、

「世界には、枕もとに食物を山ほど積んでも、食べるに食べられず、水も喉を越さんと言うて苦しんでいる人もある。そのことを思えば、むしろは結構や、水を飲めば水の味がする。親神様が結構にお与え下されてある。」『稿本天理教教祖伝』40頁とお子さんたちを励ましながら通られました。

これは、神様からお与えいた

く御守護の有り難さ、かしまの・かりものの御守護の有り難さを感じること、どんな中でも心一つで喜べるんだよ、とお教えくださった尊いひながたです。

私たちの日々は、嬉しいと思うこともあれば、つらいなと思うこともある。殊に迎える三年千日は、成人させてやろうとの親心から、普段以上に厳しいお仕込みを頂くこともあると思います。

そんなときにこそ、常にひながたを規範として、教えに基づく生き方を通していただく。それを三年と仕切って心がけること、これが年祭活動でひながたを辿るという、一つの道だと思っています。

3度の産みおろし、出直し

教祖は50年のひながたを通して、如何に人々を引き寄せ、導き、お育てくださったのでしょうか。

教祖50年のひながたと、元初りのお話の中にある「3度の産みおろし出直し、成人の歩み」から思案をいたします。

元の理には、「最初に産みおろされたものは、一様に五分であつたが、五分五分と成人して、九十九年経つて三寸になつた時、皆出直してしまい、父親なるいざなぎのみことも、身を隠された。」これが最初の出直しです。

そして、「しかし、一度教えられた守護により、いざなぎのみことは、更に元の子数を宿し込み、十月経つて、これを産みおろされたが、このものも、五分から生れ、九十九年経つて三寸五分まで成人して、皆出直した。」これが2つ目の出直しです。

さらに、「そこで又、三度目の宿し込みをなされたが、このものも、五分から生れ、九十九年経つて四

寸まで成人した。その時、母親なるいざなぎのみことは、『これまでに成人すれば、いずれ五尺の人間になるであろう』と仰せられ、につこり笑うて身を隠された。」と教えられており、これが3つ目の出直しです。

これらは成人の為の3つの段階とも言えますが、教祖のひながたの道も、大きく3つの段階に分けることができると思います。

まず最初の段階は、天保9年10月26日から嘉永6年までの時期です。月日のやしろとお定まりくだされた教祖は、最初の段階として、貧のどん底に落ち切ることを急ぎ込まれた時期です。

教祖が次から次へと、物や金を施されたとき、教祖の周りには、世間体を気にする親族、縁者や物を乞う人たちが、大勢教祖の元へ集まってきました。しかし、だんだん物も金も乏しくなつて施すものもなくなり、大黒柱である夫・善兵衛様も、嘉永6年に出直されます。そうなったとき、今まで来ていた者が誰も来なくなりました。

これがひながたの中での、最初の出直しと悟ります。これは、元の理の世界で、三寸まで成人して子供たちが皆出直し、父なるいざなぎのみことも身を隠した状況と、正対していると思案いたします。

第2の段階は、嘉永6年から元治元年までです。教祖の行われたことは、まさに2度目の「宿し込み」「生みおろし」であり、新しい門出、再出発です。

こかん様を浪速の町に遣わせて神名を流され、お母屋を取りこぼち、「これから、世界のふしんに掛かる。祝うて下され」と仰せられ、翌嘉永7年には、「をびや許し」を初めてさげつけられています。これがよろづたすけの道明けとなつたのです。以来、不思議なたすけが相次ぎ、文久・元治の頃には、26日の祭日には、8畳の間には人が入りきれないようなるほどでした。これが、元の理における、三寸五分まで成人した姿です。

元治元年には、飯降伊蔵先生が入信され、「つとめ場所」の普請が始まります。ところが、その年の



10月、大和神社の節が起こり、普請も止まり、ほとんどの人が、教祖の前から離れていきました。これが第2の出直しと悟れます。

次の第3の段階は、元治元年から明治20年1月26日となります。

この期間、教祖はつとめの模様立てを進められるとともに、つとめの人衆をも引き寄せられ、成人へと導いておられます。さらには、限定的ですが、おさづけの理もお渡しくださるようになっていきます。

そして、明治20年陰暦正月26日、いよいよ教祖の身上が差し迫ってきたとき、我が身どうなつてもという覚悟と決心のもと、おつとめを勤められました。参拝者も数千に達したと言われています。陽気な鳴物の音を満足気に聞いて居られた教祖は、午後2時頃、つとめの了^おると共に、眠るが如く現身をお隠しになりました。

元の理において、3度の宿し込み、産みおろしを繰り返し、苦勞を重ねた上で、五分から五分五分と三寸まで、そして三寸五分まで、さらには四寸までと子たちを導か

れ、その成人を見定めて「これまでに成人すれば、いずれ五尺の人間になるであろう」とにつこり笑うて身を隠された、この場面とまさに重なります。

その後、その場にいた人々は、飯降伊蔵先生を通しておさしづで、初めてその大節にこもる親心を知るのです。

子供可愛い故、を^やの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけするのやで。しっかり見て居よ。今までとこれから先としつかり見て居よ。(中略)さあ、これまで子供にやりたいものもあつた。なれども、ようやらなんだ。又々これから先だん／＼に理が渡そう。

明治20年2月18日と、それまで限定的であつたおさづけの理を、広く渡してくださいようになりました。これは、教祖を中心に進められていた世界たすけの主体が、教祖から、ようぼく、教会へと託されたということです。このお言葉を頼りに、人々はおつとめに祈りを込め、おさづけに

たすかりを願つておたすけに奔走し、不思議なたすけが随所に表れました。人々は、教祖が存命でお働きくださっていることを確信し、感激して、さらにおたすけへと向かつていかれました。

その後、教祖の年祭を迎えるごとに、三年千日と仕切つておたすけに励み、その句ごとにこの道は伸び広がりしました。

そして、このたびの教祖百四十年祭に向かつては、私たちようぼく一人ひとりがおたすけを積極的にに行い、成人した姿と成果をもつて、御存命の教祖にお喜びいただき、これが教祖の御年祭の元一日と、年祭活動の意義です。たすけの実動・実践こそが、句の理を、句の風を頂戴する重要なポイントであると思います。

誠真実を尽くす

教祖の年祭活動が、いくらたすけの句、たすかる句と申しても、必ず奇跡的な御守護ばかりを頂けるとは限りません。

以前、ある先生に、「ガンの方が

おられると、何とかたすかつていただきたいと心を込めて通わせていただく。しかし、ガンの進行度合いによっては、家族も既に覚悟を決めている。それでも布教師は、『たすかります』と言って、真実を込めて通わせていただく。しかし、遂に出直しを迎えたとき、布教師は『私の真実が足りませんでした』と泣いてお詫びをするのです。家族の方々は、『家族ですら覚悟しているのに、この人は一生懸命願ってくれる、死んだら自分のせいだと、泣いてお詫びまでしている』と、この布教師の誠真実が、家族の心を動かすのです」という話を聞かせていただきました。

おたすけの中で、誠真実のこもつた行動が人の心を揺り動かし、その方の心がほんの少し開いていく。そこから神様の理、御守護の理が入っていく、たすかりに繋がっていくのでしよう。

誠真実を尽くすことによって、必ず何かを与えてくださり、次の段階へと導いてくださる。そんなたすけの句、御守護の句が、三年

千日の旬だと思えます。

外へ向かつてのおたすけ

青年会長・中山大亮様は、青年会の6月例会で、次のように仰せられました。

「現在のようばく数は約81万人です。世界の人口が約80億人。世界人口に対するようばく人口の比率をパーセンテージに表すと、約0.01%になります。

『陽気ぐらし』『世界たすけ』を掲げるわれわれが、小さな世界でくすぶっているわけにはいきません。どんな人でも構いません。奥さんのママ友や地域の人、おたすけ相手、今自分がいる世界よりちよつと外側にいる人たちと関わっていく。われわれからどんな外へ出ていき、世界を広げていくことが、今とても大切ではないかと思えます。(中略)どうかお互いに目を向け、世界の兄弟姉妹とどんなに関わりを持ち、天理の名を世界中に広めていきたいと思えます」。

三年千日の旬を前にして、基本に立ち返ろうと、コロナ禍で控え

ていた戸別訪問を再開した教会長さんがおられます。地域との関わりからおたすけへと進みたいと、新たにこども食堂を計画されている教会があります。

私たち一人ひとり、お与えただく立場や環境、条件は違います。自分にできるたすけ、自分にしかできないたすけも一人ひとり違います。年祭活動の3年間「私なら何ができるか」と、三年千日がスタートすればすぐに働くことができるよう、残された本年の3カ月間、それぞれが思案し、心を定め、来たるべき旬を迎えさせていたいただきたいと思えます。

最後に、ちばへのつくし・運びでございます。先人たちが、ならん中、真実を尽くされたように、日々、月々、年々おかけいただく御守護、親心、御恩に対して、さらにはたすけの実を御守護いただくためにも、御恩報じの真実を運ばせていただきますよう。

(要旨)

立教百八十五年 九月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には一れつ子供可愛い親心から、日夜絶え間なくお見守り下され、時に応じて段々のお仕込みを賜り、陽気ぐらしへと導き下さいます御慈愛の程は、誠に有難き限りでございます。私共は十全の御守護にお護り頂いて、恙なき日々をお連れ通り頂く喜びを胸に、御恩報じに努め、心の成人に励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日は、おちばより当大教会にお許しを頂きました理の深き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同心を揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、九月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、尊き理を賜りたく参き集いました芦津の道の子達が日頃賜る御恵みに御礼申し上げ、共々に人々のたすかりと世の治まりを請い願って、つとめの理に沿い切る真実の状を御覧下さいます親神様にもお勇み下され、たすけ一条の道の勇んだ歩みを御守護下さいますよう御願い申し上げます。

私共をはじめ、芦津の理に繋がる教会長、ようばくは、成ってくる姿の中に思召を悟り、尚一層深く親心を求めて、心の成人に一段と励ませて頂きたいと存じます。更には今日の時旬に改めて思いを致し、秋の大祭を目標におたすけと丹精に一段と力を入れて、一手一つに心勇んでたすけ一条に真実尽くさせて頂く所存でございます。

何卒親神様には、大いなる御守護にお連れ通り下さいます、時旬の道の歩み恙なくお導き下さいますと共に、銘々の心のふしんが着実に進み、心澄み切つて、陽気ぐらしの世界実現への道を、勇んで進ませて頂けますよう、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

在籍者布教合宿を開催

布教部（竹内義忠部長）は、9月24日、25日に大教会で在籍者布教合宿を開催。27名が参加した。

24日14時30分に開講し、大教会長よりお話。「現在、コロナ禍を言い訳にし、動けなくなっているところがあるのではないか。この2日間がいい機会になるよう、喜んでをいがけに廻ってもらいたい」と話された。

その後、5班に分かれ、駒川中野駅前や平野駅前など、班ごとのポイントに向かって神名流し。到着後、路傍講演を行い、信仰の喜びを道行く人々に伝えた。

2日目、陽気ホールでにいがけドリルを実施。この日配布する



リーフレットを皆で読

んだ後、ペ
アになり、

戸別訪問の

際の声かけ
の練習やお

さづけの取
り次ぎを目

標とする思

おつとめ

辺の戸別訪

フレットを

おさづけの
者もあつた

帰会後、

い、
閉会し

参加者が

いゝいゝと

いふたにで

いふたす

くさんおれ

回つてい

んだ感想が

布教部は

布教合

布教部は、今後も参加対象を広

げ、布教合宿を開催する予定。

九月月次祭 祭典役割									
祭主	扨者	扨者	扨者	てをどり	地方	ちやんぼん 拍子木	太鼓	すりがね	小鼓
大教会長 指図方 今川政治	岩切正教	加世田洋	座りつとめ	大教会長 奥田正徳 瀧本眞二郎 会長夫人 井筒ちぐさ 浜田たつゑ	湯川正圀 山本義範 瀧本庄司	岩切正義 井筒敏成 山田道弘 竹内義忠 岡島秀男 川畑澄博	今川和子	奥田富美子	中村美津代
	賛者	賛者	前	奥田眞治 梶川和隆 瀧田宣郎 瀧本基志枝 松森明美 山埜こずえ	守田清一 吉田裕和 立花善三	西本義之 立花善次 木村真次 葭内真浩 河端芳雄 中村俊和	吉田幸子	岩切孝子	松本さだえ
	岡本久昭	西本興正	後	梶川芳男 奥田正儀 川畑正博 岩切治代 加世田陽子 奥田千晶	樋川泰士 湯川正信 榎川康紀	今川聖一 梶川芳征 石川健郎 新居里実 花岡忠和 梶川和人	竹内淳子	中村寿々代	山本広子
<div> <div>伝供</div> <div>瀧本眞二郎</div> <div>献饌長</div> </div>									<div>在籍者一同</div>

大教会秋季霊祭執行

9 月 24 日、大教会神殿、祖靈殿で秋季霊祭が厳かに執行された。

午前 10 時より、神殿の儀で大教会長が祭文奏上。続いて十二下りのおつとめを勤めた。

続いて祖霊殿の儀。初めに大教会長が祭文を奏上。祭員列拝の後、在籍者、教会長、各会の代表者と、今回合祀を願ひ出た勝明分教会、高清新教会の関係者が祖霊殿前に参進し、参拝した。

祭典終了後、大教会長が挨拶。「幾多の先人先輩方が、この道の上に真実を尽くし、心勇んだ足跡を残してくださったおかげで、今日の私たちの道がある」と感謝を述べられた上で、年祭活動について「教祖のひながたを仕切って通らせていただく。このひながたを目標に通られた初代はじめ先人先輩方の道すがらに思いを致して、心勇んで成人の道を進ませていただきました」と話された。

秋季霊祭合祀

9 月 24 日、秋季霊祭において新たに合祀されました。

新居スエ之霊

大教会准婦人

勝明分教会四代会長
新居道久之霊

勝明分教会役員
齊藤フデノ之霊

高清新教会四代会長夫人

ひのきしん隊入隊

青年会芦津分会（井筒敏成委員長）は、9 月 3 日、10 日、16 日、17 日に、述べ 11 名がお

やさとしん青年会ひのきしん隊に入隊。台風の接近に備え、さんさいの里のテント撤収や暴風対策のひのきしんなど、この時期ならではのひのきしんに汗を流した。

参加者からは、「他の分会との交流もあり、いい時間を過ごせた」との感想があった。

立教 187 年にひのきしん隊は結成 70 周年を迎える。それに向け芦津分会は、さらなる入隊者の増加を目指している。

立教百八十五年 秋季霊祭祭文

これの祖霊殿にお鎮まり下さいます、初代真柱中山眞之亮の霊様、二代真柱中山正善の霊様、初代真柱夫人中山たまへの霊様、本席飯降伊蔵の霊様、並びに芦津大教会初代会長井筒梅治郎の霊様を始め、歴代会長の霊様、眞明芦津の上に尽くし伏せ込まれました役員、教会長、ようばく、信者諸々の霊様、更にはこの度新たに霊代に書き記し合わせて祀る大教会准婦人・勝明分教会四代会長新居スエの霊様、勝明分教会役員新居道久之霊様、吉野川部属高清新教会四代会長夫人齊藤フデノの霊様、併せて壱千四百九十八柱の霊様の前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

御本部四柱の霊様には、道の芯としてようばくの先頭に立たれて、たすけ一条にご丹精をお重ね下され、温かきお心で道の子達をお導き下さいました。お蔭を以てこれの御教えの道が伸び開けて、今日の世界たすけの道がございます。又、初代梅治郎の霊様には親神様のお手引きによりこの道にお引き寄せ頂かれ、爾来御恩報じに真実を伏せ込まれ、おぢばへのご奉公と、おたすけと丹精に真心を尽くされて、今日の眞明芦津の確たる礎をお築き下さいました。又、夫々の霊様には親神様のお手引きのまに／＼眞明芦津の道の草分けの頃から、ならん中をも神一条に誠真実をお尽くし下され、或は国々処々に在っては、幾重の道すがら心勇んでたすけ一条にお励み下さいました。これの道が年限と共に結構な理をお見せ頂き、幾多の節から芽が吹いて、今日も変わらず御教え通りの道を歩ませて頂けますのも、親神様、教祖の厚き御守護と深き親心の現われでございしますが、又一つには霊様方が永の年限、代を重ねて伏せ込まれた真実の賜と、朝夕御礼を申し上げて怠る時とてございせん。その中にも今日のこの日は今年の秋の霊祭を執り行う定めの日柄でございますので、御前に種々の心尽くしの物を供え、在籍者を始め、参き集う人々と共に、御遺徳を偲び、御生前の御丹精を改めて厚く御礼申し上げます。

私共を始め、芦津に繋がる教会長、ようばく一同は、霊様方が代を重ねて真実を尽くしお築き下さった今日の道に誇りを持ち、末代続いたすけ一条の頼もしい道の御守護を頂けるように、次の成人の塚教祖百四十年祭を目指して、一手一つに心勇んで成人の歩みを進めさせて頂く所存でございます。何卒一同の真心を御心安らかにお受け取り下さいまして、皆が心嬉しくたすけ一条に励ませて頂き、この先伸び栄え行く道をお導き下さいますよう、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

事情はこび

立教185年9月26日お許し
大清分教会

任命

五代会長

段野 渉 だんの わたる
51歳



京都都高校卒業。平成22年
おさづけの理拝戴。令和2
年修養科第952期修了。

自動車運転2種免許を保持
し、タクシーの運転手とし
て長年勤めている。少林寺
拳法4段。

就任奉告祭 11月6日

教務部報

教人講習会第124回修了

山下あかね（芦山都）

立教185年9月10日

修養科第973期修了

藤田 佳代（芦島鶴）

初席《8月》

《3名》四ツ山

《2名》明高・奄美笠

《1名》東津・芦ノ郷

《順序運びより 9名》

訃報

照南分教会三代会長 始良部属

瀬戸山孝治氏（せとやまこうじ）



令和4年9月7日出直され

立教185年9月27日

た。享年78歳。

告別式は9月9日、川畑正

博・始良分教会会長齋主のもと、
照南分教会で執行された。

氏は、昭和20年7月24日鹿

児島市下荒田で生まれ、昭和

50年おさづけの理拝戴、昭和

60年修養科第528期修了、昭和

61年教会長資格検定合格、平

成8年教人登録、平成11年照

南分教会三代会長就任。

大教会では、詰員、修養科

教養掛、上級・始良分教会へ

のつくし運びに尽力された。

常に親一条の信仰に徹し、よ

うばく、信者の丹精に真実を

尽くされた。

奄美笠分教会三代会長（大島部属）
榮 暢夫氏（さかえのぶお）



令和4年10月1日出直され
た。享年89歳。

告別式は10月4日、加世田

洋・大島分教会会長齋主のもと、

秋葉斎苑（奄美市）で執行され

た。

氏は、昭和9年11月5日鹿

児島県大島郡沖永良部で生ま

れ、昭和27年神戸工業電気学

校卒業。昭和29年おさづけの

理拝戴、修養科第159期修了、

昭和46年教人登録、同年6月
26日奄美笠分教会三代会長就
任。教会本部では修養科一期
講師、大教会では詰員、修養
科教養掛、大島分教会では役
員として会計部長等を歴任、
鹿児島教区では大島支部長を
務められた。

また、長年保護司として務
められた功績から、平成18年
に「瑞宝双光章」を授与され
るなど、信者の丹精のみなら
ず、地域のおたすけ活動にも
誠真実を尽くされた。

月例統計（自令和4年1月1日）至令和4年8月31日）

項 目		初	の	修	教
名 称	内教人数	席	おさづけ 理拝戴	養科修了	人
大 教 会	(1)	9	10		
東 津	(13)	2	1		
吉 野	(23)	2	2	1	
島 川	(29)	2	2	1	1
日 原	(16)	6	1	1	
稗 方	(15)	3			1
本 島	(7)	2	1		2
日 津	(2)				1
始 高	(2)				
津 良	(5)				
門 和	(12)		1		
當 司	(6)	1	1		
大 別	(6)	1			
沖 島	(26)	2	1	2	
尼 縄	(3)		1	3	
四 崎	(2)	1			
大 山	(5)	3	1		
島 冠	(2)				
天 下	(1)				
青 保	(3)		1	1	
芦 山	(1)				
甲 浪	(1)		1		
芦 邊	(1)	1			
天 華	(1)				
入 津	(1)				
豊 野	(1)	1			
紀 周	(3)	1	3	1	
勝 明	(1)				
神 の	(1)				
兵庫	(1)		2		
芦 ノ	(2)	1			
本 明	(2)				
明 道	(1)				
芦 東	(1)				
和 鎮	(3)	2			
神 滝	(1)				
芦 明	(1)	1			
真 彰	(2)				
本 氣	(2)				
芦 明	(1)				
真 伯	(1)				
合 計	(209)	41	29	10	5